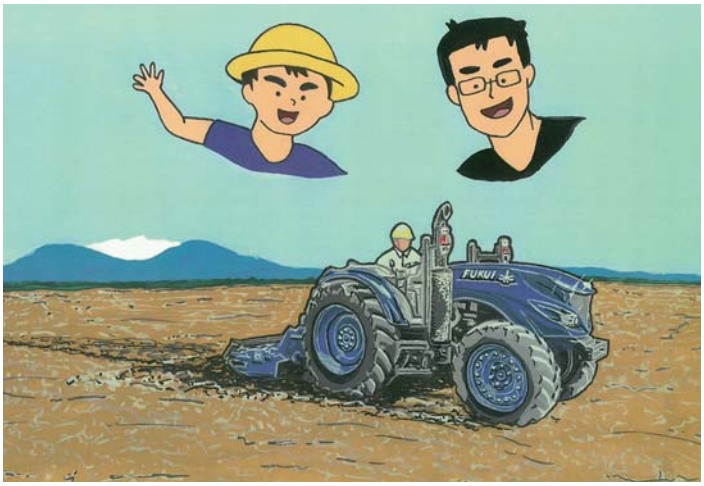
令和３年１月発行

足羽の清流

～300年の歴史を有する「足羽川用水」世界かんがい施設遺産～



足羽川堰堤土地改良区連合

ご　挨　拶

この度、伝統と歴史のある「足羽川用水」が平成 28 年 11 月 8 日、タイ国チェンマイで開催された国際かんがい排水委員会　国際執行理事会において「世界かんがい施設遺産」に登録されました。このうえない光栄であり、喜びとするところであります。

足羽川用水は、一級河川足羽川を源とし、徳光用水、酒生用水、六条用水、足羽四ヶ用水、木田用水、社江守用水、足羽三ヶ用水の 7 用水からなり、管内一円の農業、日常生活、環境、防災、生態系保全など、多面的機能を有する重要な役割を担っております。

この用水は、いずれも約 300 年以上前に実施された正確な測量技術と優れた工法を取り入れ、安定した水の確保に献身的努力を重ねられた先人の高い知識と関係者の努力が基本になっており、当時の古文書に、緻密に計算された資料が残っています。水理学、農業土木工学に卓越した技術者や多くの地域住民の手によって基幹用水路が整備されて、食糧の増産が図られ、安定した日常生活が確立されました。

恵みの水の恩恵を考えるとき、福井藩用水奉行「戸田弥次兵衛公」の偉業抜きでは語ることができません。1688 年から 1713 年まで 25 年の永きに亘り足羽川用水の大改修と安定した水配分、用水に関する規程、運営など細部に取り決めが行われ、水紛争の発生防止等用水全般の管理運営につくされた功績は誠に大きいものがあります。

こうして永い年月を経て、安定した農産物の生産、生きものと共生する農村社会の基盤となる『足羽川用水』が高く評価されたのは、地域の方々の献身的な努力と関係各位のお陰であります。

これを機に当連合の役職員、組合員そして地域住民が一丸となって、この「世界かんがい施設遺産」に登録された足羽川用水を地域の宝として次の世代を担う若者にしっかり伝えていかなければならないと思います。

足羽川堰堤土地改良区連合管内、約 2,000ha の農用地のかんがい、実り豊かな農村の生活用水、市街地の環境用水、そして子供たちが水に親しみ、生きものにふれあい、心の安らぎが得られる『足羽川用水』の維持保全、並びに利活用に、皆様方の一層のご支援、ご協力を、お願いを申し上げます。

令和 2 年吉日

足羽川堰堤土地改良区連合
理事長　吉川　強

「世界かんがい施設遺産」Q＆A

「世界かんがい施設遺産」とは何なのでしょう？

世界かんがい施設遺産は、かんがいの歴史や発展を明らかにし、広く理解を図るとともに、かんがい施設がこれからも適切に保全されるよう、歴史的なかんがい施設を国際かんがい排水委員会（ICID）が認定・登録する制度です。
登録することで、かんがい施設の持続的な活用・保全方法の蓄積、研究者・一般市民への教育機会の提供、かんがい施設の維持管理に関する意識向上に寄与するとともに、かんがい施設を地域づくりの核として活用されることが期待されています。

※　かんがい　・・・・・　田畑で作物を栽培するのに必要な水を湖、川などから人工的に引き入れて農地をうるおすこと

「世界かんがい施設遺産」にはどのような施設が登録されるのでしょう？

2019年12月時点で、世界15ヶ国で91施設、その内日本では39施設が登録されています。

登録には以下の３つの●を満たす必要があります。

- **建設から１００年以上経過していること**
- **次のいずれかの施設であること**

  ①ダム（かんがい主目的）　②ため池等の貯水施設　③堰、分水工
  ④水路　⑤古い水車　⑥はねつるべ（水の汲み上げ）　⑦排水施設等

- **定められた９つの基準のうち１つ以上の項目を満たすもの**
  （下記は足羽川用水が該当する３項目）

  ・かんがい農業の画期的な発展、農業発展、食料増産、農家の経済状況改善に資するもの
  ・構想、設計、施工、規模等が当時としては先進的で卓越した技術であったもの
  ・長期にわたり特筆すべき運営・管理を行ってきたもの

世界かんがい施設遺産　認定証

世界かんがい施設遺産　登録盾

世界的に価値が認められた開水路「足羽川用水」

足羽川用水は福井市南東部にある足羽川頭首工から取水し、約 2,000ha の農地をかんがいする７つの幹線用水 74km の総称です。この広大な農地を潤す水路網が世界かんがい施設遺産に登録されました。

世界かんがい施設遺産として評価された３つのポイント

①　歴史的価値の高さ

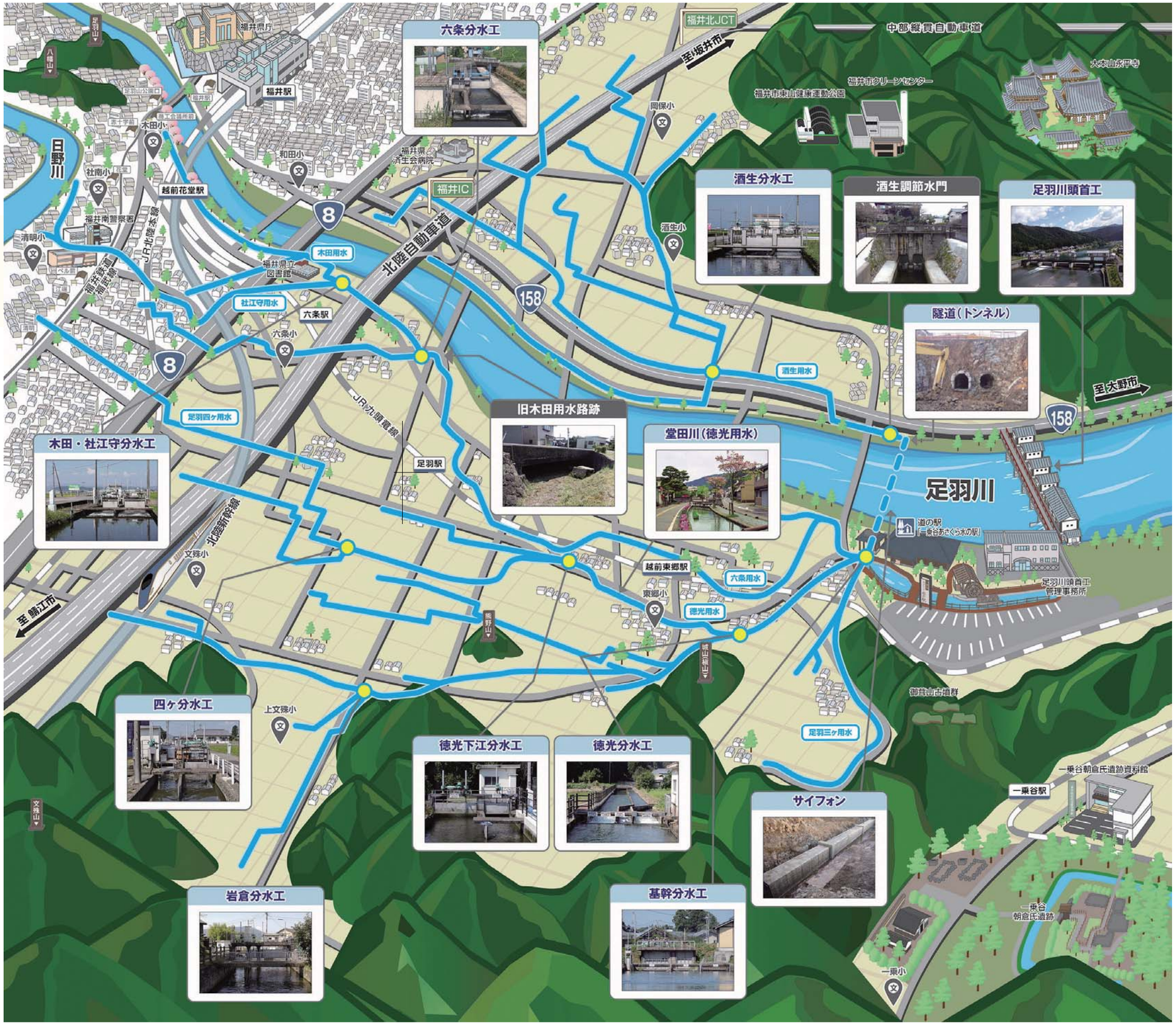
約３００年前頃に完成した足羽川用水の礎（水利体系）が、幾多の災害（水害、震災等）に見舞われるも、先人たちの努力により今も引き継がれ、地域の農業を支える重要な水路である点。

②　技術的価値の高さ

約３００年前頃には、既に、用水を川から取水する仕方や水田に公平に届ける（送水）工夫が考えられていた点。

③　社会的価値の高さ

古くから現在に至るまで、足羽川用水が農業面だけでなく、防火・生活・環境用水として、地域の活性化や地域住民の交流に貢献している点。



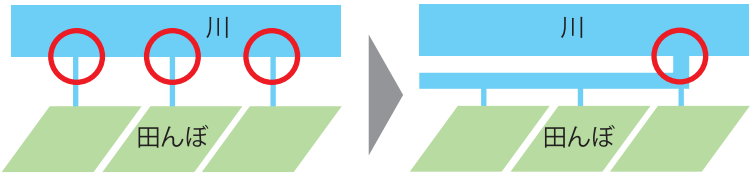
①歴史的価値の高さ

足羽川用水の始まりは、奈良時代（7 世紀頃）に開かれた荘園内の原始的な水路といわれ、足羽川から直接、各用水が取水し、渇水期は絶えず水争いが続いていました。

しかし、江戸時代宝永年間（1710 年頃）になると、用水奉行**戸田弥次兵衛公**により、複数の用水系統を統合する当時としては珍しい**合口（ごうぐち）**のための堰の設置や、水路の分岐点に**定石（じょうせき）**を布設し、水争いを緩和するなど、現在の足羽川用水の礎を築いたといわれています。

合口（ごうぐち）

それぞれ川から取り入れていた用水の取り入れ口を一つにまとめたもの。

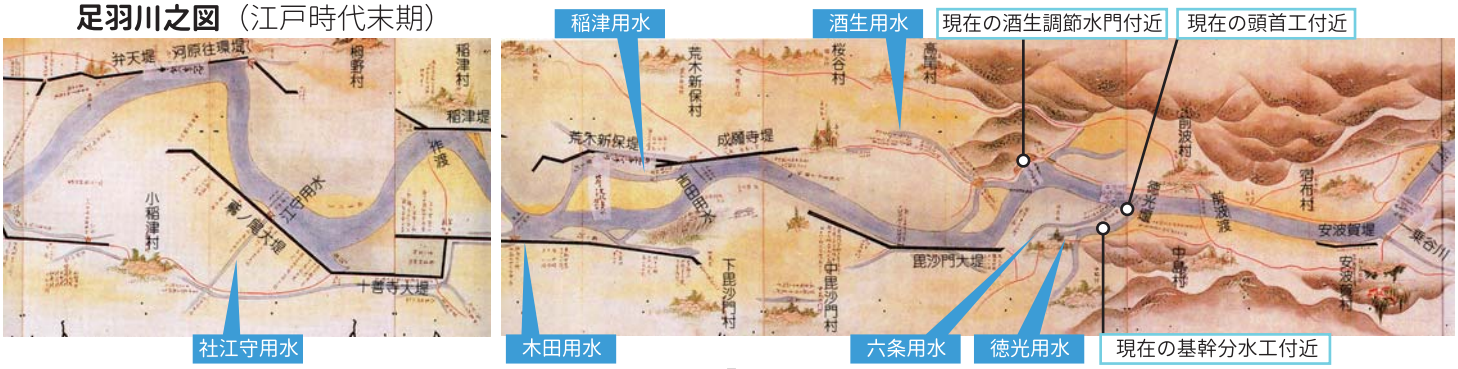


取水の安定化、水利用の合理化、維持管理費の節減などの効果がある。

水争い（みずあらそい）

水田へ用水の配分をめぐる紛争。死人がでることもあった。

足羽川之図（江戸時代末期）



②技術的価値の高さ

足羽川用水は、江戸時代宝永年間の大改修によって、取水量や分水量の基準が定まりました。当時の水路設計等は現在でも通じる高度なもので、約 300 年前の用水路の基準が今も継承されています。

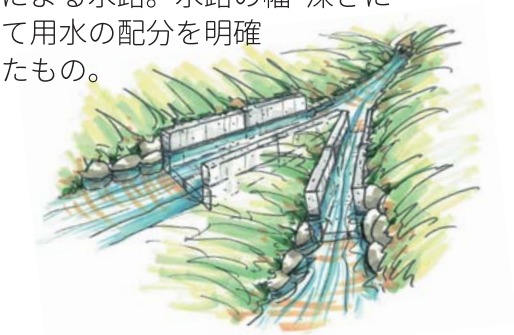
	川からの取水について	水田への送水について
課　題	●足羽川に複数の取水口が存在 上流で多く水をとると 下流では水が少なくなる ●洪水等による堰の破損が発生	●土水路で用水を送水 水の量が少なくなると 分岐点で争い事が発生
対　策 1710 年頃 (300 年前)	●取水口の**合口**と堰の強化 ※ 安原用水（現：足羽三ケ用水）の取水口と徳光用水の取水口を徳光堰に統合（左下:**足羽川之図** 参照） ※ 取水口は**木工沈床 (もっこうちんしょう)** による堰を築造	●用水路の幅･深さで分水量の基準を決定 ※ 分岐点に**定石**を設置 徳光大用水江幅相改証文帳（1710 年）
現　在 2020 年	●全ての取水口が足羽川頭首工に合口（下：足羽川頭首工　参照） 	●300 年前の用水路の基準を継承

水争い（不平等）

自然災害との闘い

定石 (じょうせき)

石板による水路。水路の幅･深さによって用水の配分を明確にしたもの。



戸田弥次兵衛公 (とだやじべえ こう)

江戸時代の初めに福井藩の用水奉行を務め、足羽川に木工沈床の取水口（徳光用水と酒生用水）通称「五本錠」の建設のほか、他の取水口や幹線用水路の大改修を行った。現在の足羽川用水の原型となっている。

足羽川頭首工 (あすわがわとうしゅこう)

足羽川の堰堤は自然災害による修繕と、不安定な取水量が争いの元となり、用水路の維持管理にも多く費用がかかっていました。

足羽川に統合井堰の建設が叫ばれ、昭和 38 年 (1963)11 月に旧足羽川頭首工が完成。その後、50 年余り経過して施設の老朽化が進み、平成 20 年度に現在の足羽川頭首工が完成しました。

昭和 38 年以前の酒生用水の取水堰

旧足羽川頭首工（昭和 38 年完成）

③社会的価値の高さ

足羽川用水は古くから、農業面のみならず防火や生活用水として、また、環境用水としても貢献しています。現在も用水を活かした地域活動が大変盛んです。

親水空間の創出

堂田川（徳光用水）

稲津親水路

上東郷親水公園

生息空間の創出

ビオトープ (管内８箇所)・環境水路 等

教育活動の実施

出前授業・環境学習会・施設見学会　等

交流イベントの開催

ウォーキング大会　等

文化の継承

おつくね祭（8 月中旬）

せせらぎコンサート（6 月下旬）

かわそ祭（7 月 30・31 日）

世界かんがい施設遺産登録を機に、農業用水や農業水利施設に歴史や役割を記した案内看板を設置しました。全部で８箇所ありますので、是非訪れてみてください。（17・18 ページ参照）

足羽川頭首工管理事務所

酒生調節水門（酒生用水）

足羽四ヶ用水

足羽川用水の７用水

足羽川用水は、７つの幹線用水の総称です。これらの用水全てが世界かんがい施設遺産なのです。

①徳光用水

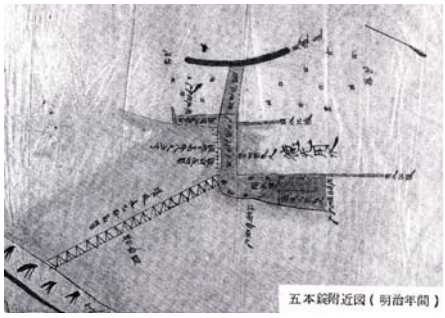
徳光用水がほぼ今の形に整備されたのは、江戸時代の元禄期頃に用水奉行 戸田弥次兵衛公によって用水に関する規定や運営方法が定められた時と考えられます。

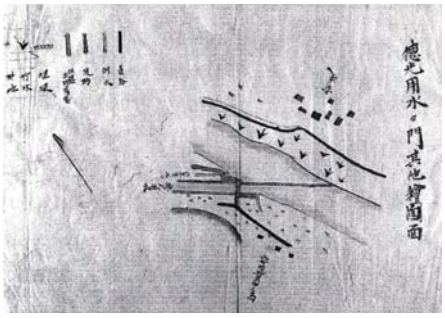
その後文化４年（1807 年）の大水害によって用水の取水口や幹線水路が損壊し、関係 27 ヶ村が協議し改修に着手しました。文化６～７年にかけて事業を実施した記録もありますが、本格的な事業実施は文政９年（1826 年）から 30 年の月日をかけて行われました。27 ヶ村の責任、請負において実施された大事業でした。

明治 32 年（1899 年）に五本錠（取水口）の復旧工事完成の際に、「文政の義農録」として「徳光用水の水は滔々尽くる事なし。永へに流れるべし。」と取水口の礎石に彫り、その功績を後世に伝えました。

現在は、足羽川頭首工で取水し、基幹分水工を経て徳光幹線用水を流下します。その先、徳光上江用水、徳光下江用水、荒木用水、田治第一用水に分水されます。徳光上江用水は、田中用水、生部大味用水、西袋大村用水、太田用水、二上半田用水に、徳光下江用水は、堂田川用水、河北用水に、荒木用水は、田治第二用水に分水され、それぞれの地区（東郷、上文殊、文殊）を潤しています。

合口前の徳光用水取水堰　絵図（明治時代）





徳光用水取水口（五本錠）

②六条用水

六条用水は、元禄 11 年（1698 年）に取水口が完成。更に、安政３年（1856 年）に大工事を行っています。

安波賀中島地係の足羽川に築造されていた徳光用水の堅牢な堰のすぐ下流に簡単な堰を設けて取水し、その水と徳光用水の洩れ水を合わせてかんがいしていました。明治 42 年の足羽川改修に伴い、徳光用水から分水するようになりました。

現在は、足羽川頭首工で取水し、基幹分水工を経て六条幹線用水を流下します。その先、毘沙門用水、木田・江守用水に分水され、それぞれの地区（上毘沙門、中毘沙門、下毘沙門、東郷二ヶ、福田、東郷中島、上六条、天王、下六条、江端）を潤しています。

③木田用水

木田用水は、文化４年（1807 年）の大洪水の際に施設が破壊し水田も一部流出するなど甚大な被害を受け、復旧の目途が立たたず、取水口を元の場所より下流で取水していました。このため、当時、木田用水に属していた毘沙門用水が孤立して水源を失いました。

現在は、六条幹線用水から六条分水工、木田社江守分水工を経て、木田用水となります。その先、木田江用水、虚空蔵江用水に分水され、それぞれの地区（小稲津、下馬、板垣、木田、別所、大町）を潤しています。

弘化 4 年の旧木田用水関係者の名前が記された石造物の一部が発見されており、旧取水口付近で見られる旧木田用水路跡と共にその歴史を見ることができる貴重な用水です。

旧木田用水路跡

旧木田用水石造物

④社江守用水

社江守用水は、戦国時代（1500 年頃）朝倉氏の与力であった江守惣兵衛により自らの領地である「江守の郷」（大町、花堂、西谷、舞屋、江守中、種池、渕、南江守、下江守、久喜津）に引水するために、上六条町地係に木堰を設けて足羽川から取水し、また、六条用水の落水も利用していました。足羽川最下流の堰であり、更にかんがいする社地区までは距離が遠く水争いが絶えない用水でした。

現在は、六条幹線用水から六条分水工、木田社江守分水工を経て、社江守用水となります。その先、社・江守用水、南江守用水に分水され、それぞれの地区（下六条、大町、別所、花堂、西谷、舞屋、江守中、種池、南江守）を潤しています。また、一部地域（江守中、種池、南江守）では、パイプラインでかんがいしています。

⑤足羽四ヶ用水

足羽四ヶ用水は、足羽川用水の 7 用水の中で唯一、足羽川に取水口が設けられなかった用水です。徳光下江用水の二口分水工が上東郷地係と上細江地係の境にあり、そこから取水していたといわれています。

現在は、徳光幹線用水から、徳光分水工、徳光下江分水工、四ヶ分水工を経て、足羽四ヶ用水となり、それぞれの地区（下細江、上莇生田、下莇生田、下荒井）を潤しています。

⑥足羽三ヶ用水

足羽三ヶ用水は、古くは安原用水または五ヶ用水といわれ、江戸初期までは徳光用水よりも上流、すなわち足羽川の７用水の中で最上流に取水口を設けていました。元禄年間の用水奉行 戸田弥次兵衛公の指示により、徳光用水と合併し、分水工を設けていました。

現在は、足羽川頭首工で取水し、基幹分水工を経て、それぞれの地区（脇三ヶ、南山、上毘沙門、小安、赤坂）を潤しています。

⑦酒生用水

地元では、文武天皇の頃（8 世紀・奈良時代）篠尾の左近長者が開削したので左近用水とも呼ばれています。元禄 5 年（1692 年）福井藩用水奉行 戸田弥次兵衛公により和田地区が酒生用水に合併しました。その後、大堰堤を築き取水口を足羽川堰 1 箇所としましたが、徳光用水の堰堤より下流にあった為に、渇水時には徳光用水堰の高さを下げるようお願いしなければならず、また、流域の地下漏水も甚だしく水争いの記録がたくさん残っています。

大正の水争い以来、地域住民の代表が関係省庁・機関に要望活動を続けた結果、順次改修・整備されました。昭和 27 年（1952 年）～ 38 年（1953 年）旧足羽川頭首工築造及び用水路改修が行われた際に、酒生用水は足羽川をサイフォンで横断して、旧取入口に接続する形になりました。

現在は、足羽川頭首工で取水し、基幹分水工、サイフォンを経て酒生幹線用水を流下しています。その先、酒生上江用水、酒生下江用水、稲津用水に分水されます。酒生上江用水は、別所用水、岡保用水、岡西谷用水、荒木第一用水に。酒生下江用水は、曽万布・印田用水、和田用水、栂野長江用水となり、それぞれの地区（酒生、岡保、和田）を潤しています。

昭和 17 年 12 月竣工の酒生調節水門は、現在水門としての機能はありませんが、旧来から取水していた隧道（ずいどう）の一部を利用して、足羽川の右岸一帯をかんがいしています。

酒生サイフォン → 酒生隧道（施工時の入口付近） → 酒生調節水門

足羽川の地中のパイプを使って、左岸から右岸へ水を送っています。

右：旧酒生用水取水口付近の隧道
左：サイフォンと接続している隧道

足羽川堰堤土地改良区連合の地域振興活動

昭和・平成の大整備

足羽川堰堤土地改良区連合は、足羽川用水の基幹施設（足羽川頭首工、導水路、主要分水工、酒生サイフォン）の維持管理を共同で行うために、昭和 38 年に設立されました。現在、足羽川用水を構成**す**る 7 用水が所属しています。

当連合は、常に時代背景に応じた対策を実施してきました。

- **21 世紀土地改良区創造運動大賞受賞（H15･23）**
- **疏水百選選定（H18）**
- **日本水大賞受賞（H18）**
- **全国土地改良功労者表彰 農林水産大臣賞（H23）**

- **「足羽川用水」が世界かんがい施設遺産に登録（H28）**

▶13 ページ

世界かんがい施設遺産登録後の取組み

農業用水の安定供給に向けた基盤が整備された現在、未来においてこれらの維持管理が滞らない為には、施設への理解の醸成が必要であると考え、平成 28 年度から 5 年間、情報発信強化の「PR 施設整備」と認知度向上の「啓発活動」を重点的に実施しています。

年代	昭和		平成		令和
	S 27 年～ 54 年（28 年）	55 年～ H 5 年（14 年）	6 年～ 25 年（20 年）	26 年～ 現在	これから
課題と対策	**農業用水の安定取水と適正配分** ● 足羽川頭首工の築造（用水の合口化） ● 幹線用水路の整備		**農業用水の安定供給 ＋ 農業用水を活かした地域振興** ● 用水路の親水護岸化 ● ビオトープの整備		

施設の整備事業

生産基盤整備

用水の合口化

足羽川頭首工の築造による 5 用水口統合

左岸で取水　右岸で取水

頭首工に取水を統合

7 用水へ分水

- 徳光用水
- 六条用水
- 木田用水
- 社江守用水
- 足羽四ヶ用水
- 足羽三ケ用水
- 酒生用水

幹線用水の整備

徳光用水路ほか
6 つの幹線用水路

農業用水の水質悪化の防止

用水路の用排水分離

老朽化による再築造

足羽川頭首工再築

水管理システム
→ 主要施設の集中制御

景観配慮 → 堰柱上部の検討

環境配慮 → 魚道の設計

機械設備の長寿命化

除塵施設

改修前 → 改修後

水管理システム

老朽施設やシステムの更新

親水空間の創出

親水水路の整備

生態系の保全

ビオトープ整備

地域の交流事業

教育活動

環境学習の実施

ビオトープや水路を活用した生き物・水質調査の継続的な実施

地域交流活動

交流場所の創出

親水公園や一乗谷あさくら水の駅等の整備

地域行事への参画

課題

- ■ 土地持ち非農家の増加
- ■ 土地改良施設の維持管理体制の脆弱化
- ■ 土地改良区や施設への認識の低下

- 世界かんがい施設遺産登録
- 足羽川用水への住民の関心が高揚
- 地域おこし活動が盛ん（堂田川等）
- 地域資源が豊富
- 地域間交流の増加（中部縦貫自動車道、北陸新幹線等）

目的

- 世界かんがい施設遺産登録を契機とし、将来にわたる維持保全活動の取組みを促進
- 足羽川用水を地域資源として幅広く活用し、地域全体を振興
（これまで整備してきた施設や地域にある歴史･文化遺産等「宝」を面的に結合）

対策

● 土地改良区や地元協議会、行政関係者等が協働し、世界かんがい施設遺産「足羽川用水」を活用した取組みを展開

取組み内容

① 発信力の強化（H30 ～） 用水路等各施設の紹介 ▶18 ページ

ミニモニュメント

水標

大型看板

⑤ 農地保全活動（継続）

多様な参画による維持活動

地域振興

- ①発信（PR 施設）
- ②安全（施設補修）
- ③交流（イベント開催）
- ④教育（出前授業）
- ⑤農地保全（多様な参画）

② 安全対策（H30 ～）

転落防止柵の補修

④ 教育活動（H29 ～）

世界かんがい施設遺産の紹介

③ 交流活動（H29 ～）

交流イベントの開催

＜　世界かんがい施設遺産登録　新聞記事　＞

日刊県民福井　平成28年11月9日朝刊

世界かんがい施設遺産
足羽川用水を登録

歴史的価値がある農業用水利施設を登録する国際かんがい排水委員会（ICID）の「世界かんがい施設遺産」に八日、福井市を流れる足羽川用水が選ばれた。かんがいの歴史や発展を明らかにし、施設の適切な保全につなげるため創設されたもので登録は県内初。

県農村振興課によると、タイで同日開かれた国際執行理事会で決定された。今回の登録については、足羽川堰堤土地改良区連合（吉川強理事長）が申請していた。

足羽川用水は、福井市南東部の足羽川頭首工（安波賀中島町）から取水し、千九百九十七㌶の農地をかんがいする幹線水路。東郷地区を流れる堂田川などを含む徳光用水をはじめ、六条、木田、社江守、足羽四ケ、足羽三ケ、酒生の計七つの幹線用水からなり、総延長は二十二㌔に及ぶ。

▲ 古い町並みの中央を流れる足羽川用水の一つの堂田川＝福井市東郷二ケ町で

この地域のかんがいは奈良時代に開かれた荘園内の原始的な水路であると考えられているが、現在の形に整備されたのは江戸時代の宝永年間（一七一〇年ごろ）とされている。

同課の担当者は「地域住民や子どもたちが足羽川用水の歴史や役割について理解を深めてもらう契機になれば」と話している。遺産には今回、国内で十四施設が登録された。

（笠松俊秀、中場賢一）

世界かんがい施設遺産　国際かんがい排水委員会（本部・インド）が認定、登録する制度。建設から100年以上経過し、かんがい農業の発展に貢献したり、卓越した技術で建設されたりしたものなど歴史的、技術的、社会的価値のある施設が対象。2014年度に創設。世界での登録件数は今回を含め50施設となり、うち日本国内は27施設。

＜　世界かんがい施設遺産登録　記念式典　＞

平成 29 年 3 月 16 日（木）福井市東郷公民館にて開催しました。来賓４名、参加者 319 名と、多くの方が来場し共に世界かんがい施設遺産登録を喜びました。

上段左から
・主催者挨拶
　足羽川堰堤土地改良区連合
　　吉川　強　理事長
・来賓挨拶
　　西川一誠 福井県知事（当時）
・講　師
　日本 ICID 協会
　　林田 直樹　会長

下段
・講　師
　東郷ふるさとおこし協議会
　　平本 秀信　会長

足羽川用水の
基礎を築いた
功労者

戸田弥次兵衛公

＜　戸田屋敷　＞

戸田屋敷の前身は徳光館であり、戦国時代には朝倉氏の出城でした。永正の頃（1500）朝倉氏影の三男、中島景康により築城されました。江戸時代になり、元禄元年（1688）戸田弥次兵衛公が福井藩の用水奉行を拝命し、正徳３年（1713）の代官職に就くまでの 25 年間、徳光館を奉行所兼住宅としました。ここでは特に、徳光用水と安原用水の統合、幹線用水の大改修、更に足羽川の堰堤木工沈床工事と東大味のため池の構築、これらの用水に関わる 25 年間の水争いや苦情等の調整に努められました。村人とも親しく接し、村人も氏を敬い戸田屋敷と呼ぶようになりました。

現在は一面の田んぼになっています。場所は奥ケ谷の入り口あたりで、今に残る小字「中笠屋」にありました。平成 10 年（1998）には墓石と共に顕彰の碑を建て遺徳をしのんでいます。

＜　用水ため池　＞

戸田弥次兵衛公が造ったとされ、東大味の大味川に沿って上ると現れる大きなため池です。昭和８年（1933）、22 年（1947）に拡張工事が行われ、南北約 65m、東西約 45mの現在の姿になりました。

ため池のそばには戸田弥次兵衛公を祀った小堂が建てられ、命日である 11 月 18 日には町内の西蓮寺で「戸田祭」と称した法要も行われます。現在も農業用水として東大味町民に大いに親しまれています。

戸田弥次兵衛祀 ▶

酒生用水の
はじまりの
伝説の人

左近長者（生江東人）

いくえの あずまひと

＜　酒生用水の始まり　＞

文武天皇の頃（697 年～ 700 年　奈良時代）、左近長者といわれる大きな家がありました。名を生江氏といい、一帯に大きな勢力を持ち、当時の足羽川も生江川と呼ばれていました。

この長者には、賢く人々の尊敬を集める息子がいました。世恒様と呼ばれるこの息子は屋敷の一角のお堂で毎朝晩お参りをしていましたが、ある日お堂の中に一斗の米が入った麻袋が置かれていました。世恒様はその米を仏様へのお供えにし、お参りに来た村人へ配っていました。不思議なことに毎日お供えしても、干ばつで苦しむ村人に米を分けても、麻袋の米はいつのまにか一斗ほどの米に戻っていました。やがてその評判は国守の耳に届き、袋を取り上げられてしまいますが、国守の下で米が無くなってしまった袋は、世恒様の手元に戻り、再びお供え米が湧き始めました。

（次ページに続く）

世恒様（左近）は、大水や干ばつを防ぐため、生江川に堤防を築き、用水を開き、ため池を造り、豊かな農地を開拓しました。それで、感謝の意を込めて、この地を「酒生」（＝さこう＝左近）と呼ぶようになりました。

▲ 五重塔跡礎石

＜　左近長者伝説　＞

天神山の百以上に上る古墳群は、左近長者一族のものであるといわれています。また、氏寺として篠尾町に建てられた「五重塔」は、高さ約 34mの奈良県法隆寺の五重塔に匹敵するといわれ、礎石はその寺院の巨大さを物語っています。

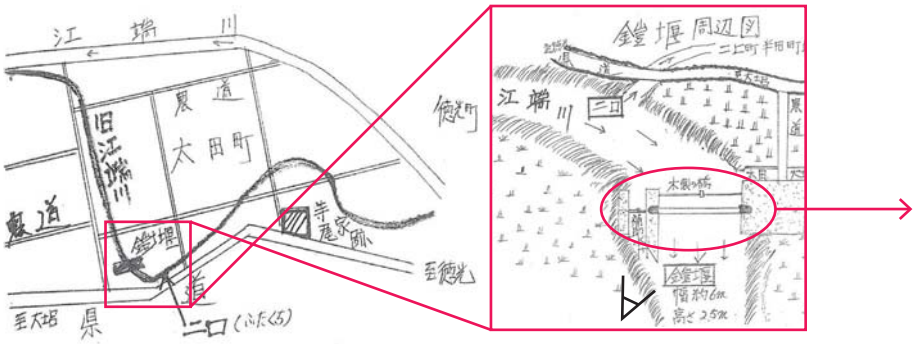
寺尾新左衛門

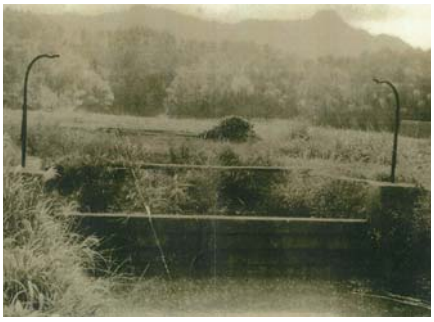
俳優の
故 宇野重吉さん
寺尾聰さんの
ご先祖様

＜　鎧堰（よろいぜき）　＞

福井市太田町を流れる江端川は改修前には一部が太田町の東南を流れていました。そこに鎧堰が設置され、太田町、半田町、大土呂町、今市町等に用水を送っていました。

鎧堰は錠を下げることで下流は潤いましたが、上流の排水が悪くなり、たびたび集落間の紛争が起こりました。この錠を管理（水管理）していたのが「東の旦那」と言われ江戸時代より苗字帯刀を許された寺尾新左衛門でした。その苦労の様子は、近年地元で発見された「悪用水（江端川）の江浚証文」にも表れています。



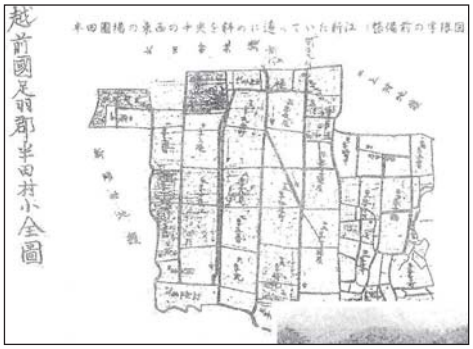

▲ 鎧堰（昭和 37 年撮影）

悪用水（江端川）の江浚証文

村別で分担して、江端川の柳切、江浚作業の見分に来た役人の案内役が錠番の新左衛門。仕事が無事に終わったところで「今後文句が出ないように一札入れてお渡しします」と書かれています。江浚をしないと、堰止めした時に泥がたまり上流で水がつき、又、堰をあげると下流が水不足となりました。特に渇水期は調整が難しく水争いが度々起きたといわれています。

布村吉左衛門

文殊の義人
新江掘削の
大恩人



＜　新江の掘削　＞

布村吉左衛門は自家所有石高 50 石※を有する太田村の方。昔は半田村、大土呂村、新開村、今市村は徳光用水の落水をかんがいに使用していましたが、水路の流れが悪く、特に早い干ばつの時には農民が困り果てていました。

吉左衛門は東奔西走し、私財を投じながら、天保 10 年（1839）から 15 年（1844）までの 5 年をかけ、太田村の中央から半田、大土呂を経て今市までの新江（幹線水路）を整備しました。川幅 2m、深さ 1m、延長約 11km、かんがい区域は約 120ha にも及ぶ大事業でした。この義挙を讃え、明治 10 年（1877）に半田町の愛宕神社内に水理神社を建て招魂社として毎年参拝されています。再整備により、現在はその姿を見ることはできませんが、農業振興への思いは引き継がれています。

▲ 水理神社

※　石高とは土地の標準的な収量（玄米収穫量）を意味する。
また、1 石は 100 升、1,000 合に相当し、成人が 1 年に食する米の量（約 150kg）に相当する。

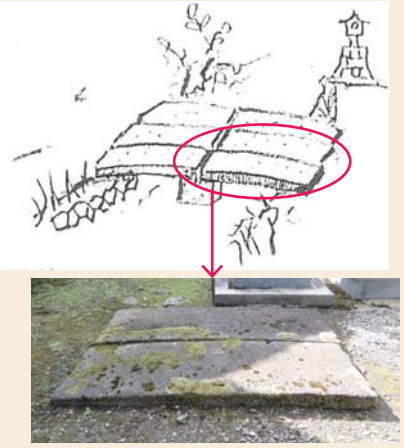
橋にまつわるお話

＜　能登塩橋（のとえばし）地蔵の縁起　＞

上東郷にある能登塩橋は、上東郷町から上細江町に流れる徳光下江用水（能登江川）にかかっています。昔、橋の架けかえに、難儀していたところへ能登の塩売りが通りかかって「人柱を入れるとうまくいく」と説明していきました。区民は協議しましたが誰も人柱になる者はいません。それで、塩売り商人を無理矢理人柱にして埋めてしまいました。工事は完成しましたが、人柱の霊が川岸に現れるので人々は恐れていました。その噂が商人の妻の耳に届き橋を訪ね、石板に「南無妙法蓮華経」と書いて川へ投げ入れて夫の霊を慰めました。以来姿を現さなくなった、と言われています。この橋脚と橋板は今も石仏の元に祀られています。

＜　六枚橋　＞

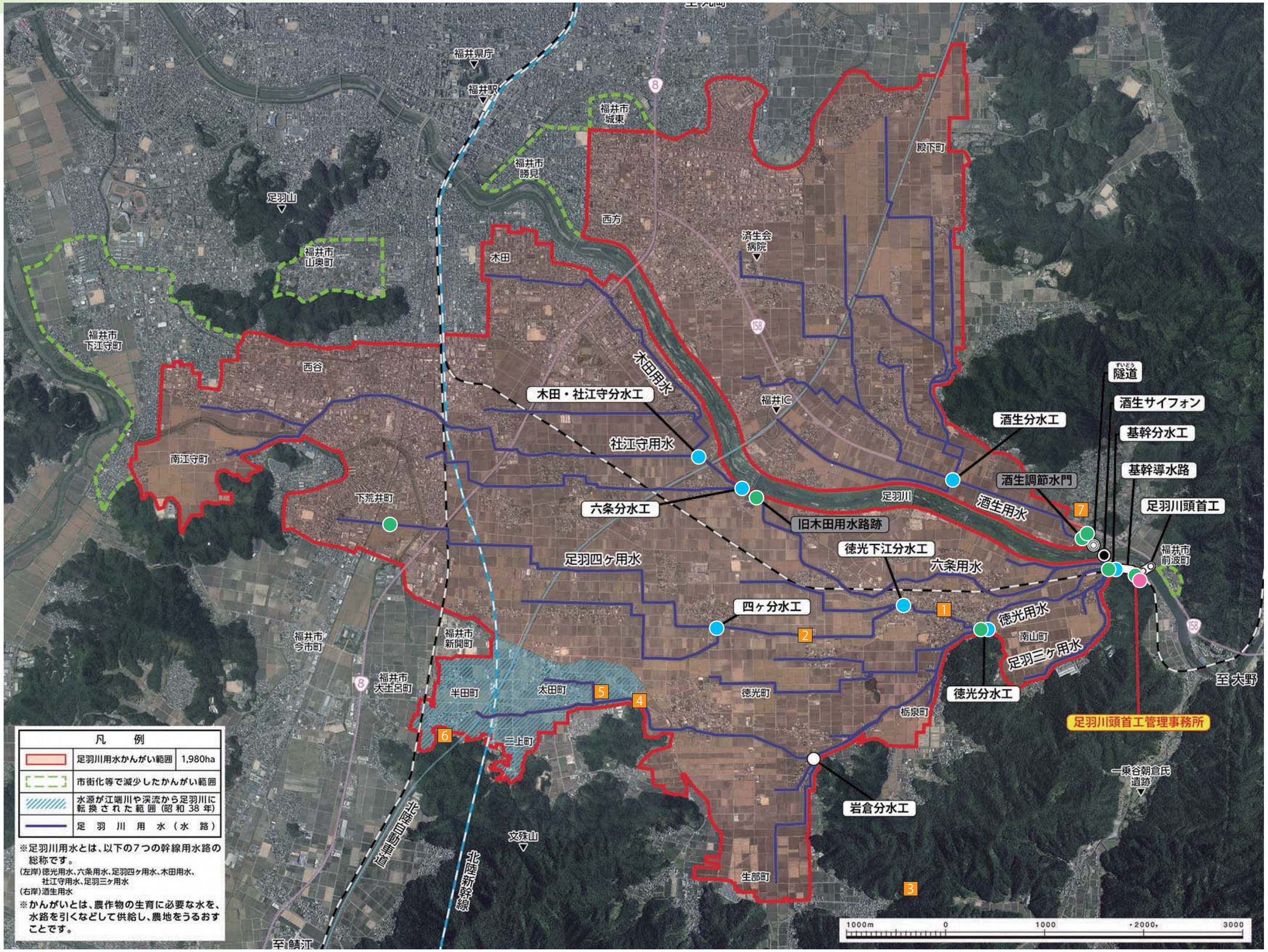
中毘沙門町から東郷二ヶ町に出るのに三昧道（さんまいみち）がありました。学校道、中道ともいわれたこの道は、六条用水路を渡り、東郷霊園から南へ地蔵堂の前を通り、堂田川を渡って真っすぐ小学校に行く幅一間（約 1.8m）ほどの狭い道でした。この道の堂田川に架かる橋は笏谷石で六枚橋（現、駅前大橋）と言われてきました。この橋は川の真ん中に橋台があり、両側に 3 枚ずつ橋板が掛けてあったため六枚橋と呼ばれたと思われます。橋板一枚の大きさは、長さ約 2 m、幅約 70 ㎝、厚さ約 20 ㎝でした。



照恩寺にある橋板（2 枚）

現在は道も橋も様変わりし、当時の姿は東郷地区の照恩寺に残る橋板に見られます。わだちの跡や継ぎ手やくさびの跡に昔の生活が偲ばれます。

足羽川用水　見にきてマップ



ミニモニュメント
各用水の歴史を紹介しています。

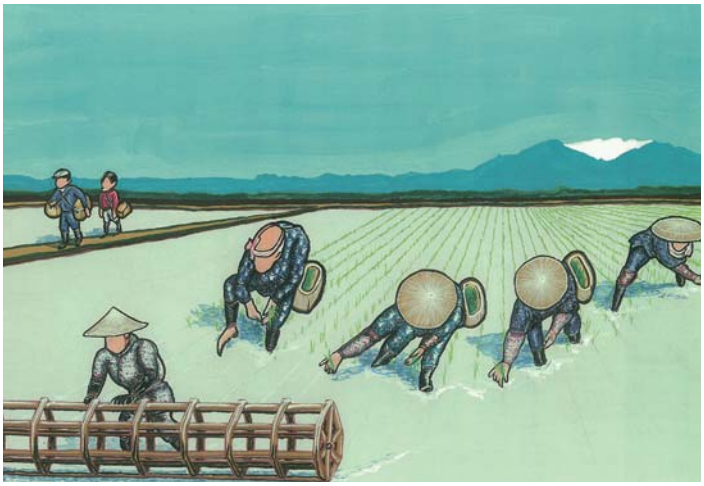
水標（みずしるべ）
頭首工からの距離を表記しています。

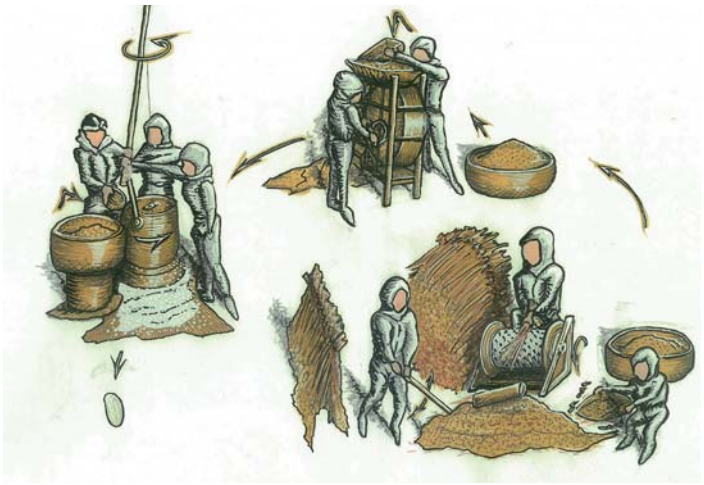
大型看板
足羽川用水全体を紹介しています。

昔のお話スポット
14 ～ 16 ページの施設の位置です。

1. 六枚橋（照恩寺）
2. 能登塩橋（石仏等）
3. 用水ため池
4. 戸田屋敷（石碑）
5. 鎧堰（位置のみ）
6. 水理神社（愛宕神社）
7. 五重塔跡礎石

足羽川堰堤土地改良区連合のホームページはこちらから！





表紙と裏表紙の絵は、紙芝居「足羽川の清流と美味しいお米」から抜粋したものです。

足羽川堰堤土地改良区連合では、紙芝居やパンフレットを活用して、農業や世界かんがい施設遺産足羽川用水について出前授業を行っています。